

## 大学院における地域・精神保健看護学特論Ⅱの 沖縄フィールドワークについて

A Field Work in Okinawa -A Case Study of the Community and Mental  
Health Nursing Advanced Course II at Graduate School of Seisen University

稲垣 絹代<sup>1)</sup>\*, 原田 小夜<sup>1)</sup>, 間 文彦<sup>1)</sup>, 安孫子 尚子<sup>1)</sup>,  
Kinuyo Inagaki, Sayo Harada, Fumihiko Hazama, Shoko Abiko,

藤居 貴子<sup>2)</sup>, 清水 めぐみ<sup>2)</sup>, 大内 正千恵<sup>2)</sup>  
Takako Fujii, Megumi Shimizu, Machie Ouchi

キーワード 沖縄, フィールドワーク, 歴史, 文化  
Key Words Okinawa, field work, history, culture

### 抄 録

**背景及び目的** 沖縄の歴史や文化を踏まえた公衆衛生看護と精神保健看護を学ぶため、大学院の地域・精神保健看護学特論Ⅱにおいて沖縄現地にてフィールドワークを行った。この教育実践から得られた成果と課題を明らかにすることを目的とした。

**方法及び結果** 参加した教員と院生の感想から、沖縄戦の集団自決の事実、米軍基地被害の実態、ハンセン病療養所の歴史と現代に続く人権侵害、沖縄の公衆衛生看護の歴史、沖縄の精神保健の実情など、フィールドワークならではの学びがあり、今後の地域看護実践や教育に活かす必要性を学んでいた。

**考察** フィールドワークの時期やスケジュールなどは検討する必要がある。事前学習やフィールドワークで得た知識だけでなく、関連する文献などで学びを深めて、統合する作業が事後には必要である。

**結論** 沖縄フィールドワークは、沖縄の歴史的事実から現代の看護や未来への教育の在り方を考える好機となり、大学院教育として次年度も継続する必要がある。

## I. 緒 言

平成27年3月に看護系大学協議会から報告された「看護系大学院における教育の基準策定と評価に関する調査研究」では、博士前期課程で習得すべき10の能力と「能力の内容」42項目に対する教育方法を明らかにしている。

聖泉大学大学院看護学研究科では、本年4月開学にあたり、「①社会の保健医療ニーズに応える知識・実践力のある人材の育成、②医療従事者間の調整やマネジメント能力の育成、③実践の場における看護学教育と研究の担い手の育成」と大学のHPで教育理念を掲げている。その教育理念に基づき、地域・精神保健看護学領域では「地域で生活する人々の多様なニーズに対応でき、潜在化した地域ニーズを把握し、予防的な介入ができる

人材を育成するため」のカリキュラムを構築した。地域・精神保健看護学領域を選択する院生は地域・精神保健看護学特論Ⅰ、地域・精神保健看護学特論Ⅱ、地域・精神保健看護学特論演習の科目履修が必修となるカリキュラムである。地域・精神保健看護学特論Ⅱにおいては、科目担当責任者が従来より沖縄で生活しており、普段知りえない異文化の地で遭遇する経験を重要視していた。そのため、沖縄の歴史や文化を踏まえた公衆衛生看護と精神保健看護を学ぶために、現地にてフィールドワークを行った。

参加した教員及び院生の振り返りや関係者の反応などから、この教育実践から得られた成果と課題について明らかにし、次年度への継続の可能性について検討することを目的とした。

1) 聖泉大学看護学部看護学科 School of Nursing, Seisen University

2) 聖泉大学大学院 看護学研究科 Graduate School of Nursing, Seisen University

\*E-mail bykfgo27@yahoo.co.jp

## II. 方法及び結果

### 1. フィールドワークの概要

#### 1) フィールドワークを始めるまでに

- (1)地域・精神保健看護学特論Ⅱの教育内容について、担当教員3名で事前の打ち合わせを前期開始早々に行った。日本国内で他と異なる歴史的、文化的背景を持つ沖縄地域でフィールドワークを行う計画を科目責任者の稲垣が提案し、教員及び院生の参加意志を確認、日程、負担費用などの希望を聞き、計画の概要を作成した。
- (2)フィールドワークの内容は、沖縄県名護市の名桜大学看護学科の学部1年次生対象のケアリング文化実習の一部を参考にして計画を立て、沖縄の旅行社に航空運賃と宿泊費、移動用の車と運転手の経費の見積もりを依頼した。
- (3)フィールドワークに協力を依頼する施設、講師、ガイド等の内諾を得て、計画書を本学の教務課、学長、研究科長に提示し承諾を得た。研究科教授会で学外フィールドワークを後期科目として実施することを報告し、承認を得た。以後、講師などへの依頼文の作成を教務課に依頼した。
- (4)移動する車の座席に余裕があったので、教員及び院生へ若干の参加希望を募った。最終的に教員4名、院生3名の参加となり、事前学習として、「戦後『ゼロ』年の沖縄」や「入門沖縄のハンセン病問題つくられた壁を越えて」などの資料を配布した。

#### 2) フィールドワークの実際

参加した教員と院生が終了後1週間以内に、テーマごとに分担し、A4用紙1枚に学びと感想を以下のように詳述した。

(1) 教員としてフィールドワークに参加して

##### ①チビチリガマとシムクガマの住民の集団自決～ 対照的な結末～：安孫子尚子

沖縄フィールドワークの初日は、読谷村のチビチリガマで、よみたんガイド風の会の比嘉涼子さんよりガマで沖縄戦当時に起きた集団自決の説明を受けた。ガマとは、沖縄本島南部に多く見られる自然洞窟のことであり、読谷村波平地区には、2つの主要なチビチリガマとシムクガマがある。この場所は、県外の多くの生徒や学生が、修学旅行で平和学習を行っている。

チビチリガマでは、沖縄戦の米軍上陸に際して140人の住民が避難し、1945年4月、米兵が投降

を呼びかけるなか、集団自決が行われた。集団自決の方法は、無残なものであった。住民同士の刃物類による殺しあい、母の手にかかった幼い子ども、看護師による毒薬の注射、布団などに火を放ったのち煙を吸って死亡するなどで83人が死亡した。私が話の中で特に悲しみを感じたのは、自分自身で生死の判断をすることができない子どもの存在であった。ガマの入り口付近に建てられたチビチリガマの犠牲者の石碑には、死亡した住民の氏名と当時の年齢が刻まれ、約6割が18歳以下の子ども達であった。一方、チビチリガマと対照的な結末を迎えたのはシムクガマである。シムクガマは、チビチリガマから2～3kmの距離に存在している。シムクガマでは約1,000人の住民が避難していた。シムクガマでは、米兵の投降の呼びかけに対して、ハワイからの帰国者である比嘉平治と比嘉平三の2人が「アメリカガー、チュォクルサンドー（アメリカ人は人を殺さないよ）」と住民を説得し、1,000人ほぼ全員が投降し命を落とさずに済んだ。

対照的な結末を左右したのは、チビチリガマが当時の軍国主義による「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪過の汚名を残すことなかれ」といった住民への日々の教育（洗脳）と、シムクガマが比嘉平治と比嘉平三の「ぬちどうたからだ（命こそ宝だ）」の考えに基づく行動だった。チビチリガマの住民は、日々行われていた皇民化教育によって、集団自決の悲しい道をたどることになったのだ。戦後70年、「ぬちどうたからだ（命こそ宝だ）」は、国民が当たり前のように感じ、急速な高齢化に対して、健康寿命の延伸を目指す健康づくり対策が全国で取り組まれている。私達、看護職は、生命の尊さを再認識し、生命が輝くための、人間理解や環境整備、健康増進を目指し支援する役割があることを痛感した。

##### ②辺野古テント村・キャンプシュワブゲート前： 間文彦

現在、日本とアメリカが進めている普天間飛行場の辺野古への移設問題において、辺野古移設に反対を訴えている辺野古浜のテント村の人から説明を受けた。その中で沖縄県民は、県民の辺野古移設反対の思いが国に伝わらないことに対して怒りや苛立ちを訴えている。その理由は、国の政策として、辺野古移設の重要性や必要性など説明不足で、民意を反映していないことを理解できた。

私たちが新聞やテレビのニュースを通じて知りえた情報が全てではなく、沖縄県民との思いのずれを痛感した。これまでの経過として、アメリカ兵による少女レイプ事件やヘリ墜落事故など情報開示が十分でなく地域で生活する人々は脅威・怒りを感じているのが現状である。また、大きな問題として第二次世界大戦中、沖縄が戦地となり多くの犠牲者を出したことを国は十分受け止めていないように感じた。このような中で辺野古移設の計画は進んでいる。

その後、キャンプシュワブゲート前で反対運動を行っているテントの集会に参加した。キャンプシュワブゲート前のテントの集会では、参加団体の代表者が挨拶を行い国の政策の矛盾点も含めそれぞれの立場で辺野古移設反対を訴えていた。また、現在国会で進められている安全保障関連法案が沖縄県民にとっては重要課題の問題であることが理解できた。辺野古テント村・キャンプシュワブゲート前において、想像できないエネルギーが感じられた。私たちも辺野古移設に関して考えることの必要性を痛感した。午後から辺野古移設反対の県民集会が行なわれる予定であったが、午後からの予定されていたスケジュールのため集会参加は行わなかった。翌日の朝刊では、第一面に集会の様子が記載されていた。

### ③「沖縄の精神保健医療について歴史的な視点からの検討」という名桜大学精神看護学領域 鈴木啓子教授の講義を聞いて：間文彦

沖縄県の精神医療の現状として、精神科医療施設（有床）は25施設。病床数5,632床で、病床を有していない精神科診療所及び精神科外来が46施設である。沖縄県の特徴として、精神科病床数は人口万対39.6床、全国人口万対27.1床を上回っている。1963年日本本土で全国精神衛生実態調査実施後、1966年沖縄県精神衛生実態調査が3年後行われた。沖縄県の精神科病床数の増加、精神障害者の有病率は本土は12.9、沖縄は25.7であることが調査の結果明らかとなった。沖縄県の精神障害者と思われる人々は、他の人々のようにうまく社会生活をしていくことが困難であり、他の人から見ればどうもおかしいなど、地域内の付き合いに問題がある人が聞き取り調査で明らかとなった。また、小さな村のほうが精神障害者も多いといった地域差もうかがわれた。現在沖縄県は、統合失調症やうつ病、アルコール依存症が多いのが

特徴である。また自殺率も高いのが現状である。このような状況から、沖縄戦が原因であるかは十分研究されていないが明らかにすることは重要であると感じた。私は今日まで、精神障害者の地域差は理解できていたと思っていた。しかしながら、統計学的であり実際現地の現状にふれた地域差ではなかった。

今回沖縄に3泊4日地域・精神保健看護学フィールドワークに参加させていただき、地域の特徴をふまえて、地域・精神保健看護に取り組んでいくことの重要性を痛感した。またこのフィールドワークを通じて、第二次世界大戦が沖縄にもたらした現在の問題を改めて感じる事ができた。

### ④「沖縄の看護の歴史と公衆衛生看護活動」という名桜大学地域看護学領域 永吉ルリ子教授の講義を聞いて：原田小夜

永吉先生からは、琉球史、沖縄医学史や戦前、戦後の看護教育と戦後の公衆衛生看護活動について、講義を伺った。戦後の沖縄は、島嶼としての地理的環境、戦争による破壊的な社会環境のため、保健医療の整備は皆無に等しい状況であり、住民の健康の保持増進のために保健婦の駐在制度が始まった。永吉先生も公衆衛生看護婦として、県に採用された1年目から駐在保健婦として離島で活動されていた。結核患者やハンセン氏病の在宅療養を支援していた。新人が一人で、離島で活動するのは大変なことである。こうした活動を支えたのは、看護の基礎知識、技術であり、一人で活動する駐在保健婦を支える保健所の保健婦長＝金城妙子氏の存在であると述べられた。現在の保健師の活動指針には、地区活動が推進され、地域に責任を持てる保健師ということが重要になっている。駐在保健婦はまさにこうした地域に根ざした活動であったと、改めて考える機会になった。

注釈：1948年（昭和23年）公布の「保健婦助産婦看護婦法」においては、看護婦、保健婦と呼ばれていたが、2002年3月からは、法律の題名が「保健師助産師看護師法」と改正され、男女関わりなく「看護師」または「保健師」として規定されるように改正された経緯がある。上記本文の内容は、ほとんどが2002年以前の歴史的な説明であり、現在の保健師活動を考察する部分のみ、保健師という表現とする。

### ⑤沖縄におけるハンセン病者の置かれた環境～戦

## 争と隔離の歴史から～：原田小夜

国立療養所沖縄愛楽園は、沖縄県名護市の済井出にあるハンセン病療養所である。私達は、療養所の歴史について、資料館の学芸員の辻央さんから話を伺った。ハンセン病者の療養について、沖縄という地域の特性があった。

ハンセン病療養所は、今では「隔離」という間違った政策であることは自明であるが、ハンセン病者の療養の場として、日本国内に療養所が各地に作られていった。しかし、沖縄では療養所が設置されずに病者は放置されたままであった。ハンセン病は遺伝病と考えられており、貧しい人達の集まるバクチャヤーで生活していたとの報告があり、ハンセン病者が沖縄に多かった背景に貧困や病気に対する知識不足が影響している。熊本回春病院から青木恵哉が派遣されたが、県議会、住民からの猛反対で挫折し、住民から迫害を受けていた沖縄のハンセン病にキリスト教の福音を伝え、病者と共に掘った小屋やガマ（ほら穴）に住んでいた。住民からの反対は激しく、1932年の療養所設置に反対した住民が役場を襲撃した嵐山事件や1935年の屋部焼き討ち事件によって各地を追われて、風葬の墓場で水もないジャルマ島にたどりついた。現在の愛楽園は、青木らが自費で購入した土地、屋我地大堂原（うふどうばる）にある。沖縄にはユイマールという近隣住民の助け合いの活動が根付いている。その中からはじき出された人達がハンセン病患者であり、その家族であったのだと考えさせられた。今年、戦後70年になる。愛楽園でも沖縄戦の傷跡が多く残されている。資料館には、攻撃を受けた跡の残る塹が再現されている。また、療養所内には、入所者が掘った早田壕が残されている。壕の外側には、貝殻が多く見られ、この壕の壁は硬く、末梢神経障害を持ったハンセン病の入所者がどれくらい身体に傷を負ったのだろうか。この壕は入所者が自分の命を削って掘ったものである。その壕の中に実際に入って見た。暗く、湿気が多い。爆撃を避けるためには、病状が重い、体力の低下した入所者は外に出られない。爆撃による死亡は1名ではあったが、衛生状態が悪い中、栄養失調やマラリアによって、亡くなった人が288名もいたという。資料館には、終戦直後に重症者が寝ていた病室が再現されてあった。とたんで作られた高温になる病室で、とても療養所とは言い難い環境の中、療養する入所者の姿で

あった。今回のフィールドワークは、見ることも聞くことだけでなく、五感をフルに使って考える体験であったと思う。今、どこの療養所も入所者が高齢化し、体験を語ってくださる入所者も少なくなっている。私達看護職は、ハンセン病の差別、偏見、隔離の歴史を風化させないように、学生や後輩たちに知らせて行くことの大切を改めて感じた。

(2) 授業としてのフィールドワークに院生として参加

### ①読谷村、チビチリガマ、サトウキビ畑の案内： 藤居貴子

沖縄フィールドワーク初日、私たちは読谷村役場に向かった。読谷村の人口は40,701(7月末)で、村の人口では全国1位である。また、読谷村の総面積に占める米軍基地の割合は、1972年時点で73%、2008年時点で36%になる。日米地位協定第2条4項aの「合衆国軍隊が施設及び区域を一時的に使用していない時は、日本政府は臨時にそのような施設及び区域をみずから使用し、又は、日本国民に使用させることができる」に注目し、野球場や村役場等の施設を建設していき、結果的には米軍基地は縮小せざるを得なくなった。このように村民が憲法やことば、風水学等さまざまな力を屈指し、人と人とが結束して、文化、村づくりが成し遂げられたのだということを知った。私は、村民が「村を、沖縄を守るのだ」という強い気持ちがそのような大きな力となったのだと考え、沖縄の人々の底力を感じた。米軍基地がすぐ近くにあるため、説明を伺っている間、幾度となく米軍のヘリコプターが飛んで来た。それが、沖縄の日常であった。民家に墜落した軍用機オスプレイも日常的に沖縄の上空を飛んでいるとのこと、その近隣には学校があり、子ども達が元気に部活動をしている声が聞こえてきていた。そのような危険と隣り合わせの日常で生活をされている沖縄の人々の不安は、私の想像をはるかに超えていることを肌で感じた。

今回、沖縄のフィールドワークを終え、地域の特殊性が滋賀県とは大きく違うことを知った。看護職として地域看護を行う上で、地域性を熟慮し、地域に応じた方法を検討していくことの重要性を改めて学んだ。また、他大学の大学院生との交流は初めてであり始めは少し緊張した。しかし、一緒に食事をしながら研究テーマやそれぞれの職場

のこと、地域性について等、とても楽しくディスカッションができた。地域や大学、研究テーマが違って学ぶこと、研究することは同じであり、彼女たちも自分と同じように悩み、苦しんでいることがわかり、遠い地に仲間ができ、とても心強く感じた。このような貴重な機会をきっかけに沖縄と滋賀との交流が続いていくことで、地域間の学習や研究がなされるとそれぞれの大学院生の深い学びになるのではないかと考える。

## ②沖縄フィールドワークで学んだこと：清水めぐみ

### (i) 米軍基地と沖縄

「イデオロギーではなくアイデンティティ」という言葉が印象に残る辺野古テント村、キャンプシュワブゲート前であった。多くの人がテント村に集まり、基地に反対する自分たちの気持ちを訴え、行動で示しておられた。基地を間近に見て、緊張を強いられて生活する方々の気持ちを少し理解できたと思った。危険な軍事基地は、自分のところになればそれでよいというものではなく、軍事基地に命を脅かされる地域の暮らしに関心を持ち、事実を正しく知って判断し、行動を起こす必要がある。

日常に戻ってからも、沖縄の基地や沖縄戦の問題に関心を持ち続け、考え、行動するようになりたい。

### (ii) 沖縄の看護の歴史と公衆衛生看護活動

沖縄の戦後公衆衛生看護活動の大きな特徴は「保健婦駐在制度」である。県保健所所属の保健師が市町村役場等、住民の身近なところを拠点に、結核の在宅療養から、母子保健、予防接種、精神保健など、担当地域のすべての人々を対象に保健婦活動を行っていた。地域に密着し、まさに「地域に責任を持つ保健婦活動」であったと考えられる。その活動を支えるのが、保健婦活動の質を向上させるための研修制度や保健婦教育、行政における強力な支援体制であった。また、米国人看護指導者の方針も適切であった。

1997年に地域保健法が施行され、各市町村に保健婦が設置されたため、保健婦駐在制は廃止された。保健婦一人に対応することは負担が大きく、また、3～5年ごとに担当者が替わり、個別支援の継続が困難である等の欠点はあるにせよ、地域のニーズを把握し、地域の健康づくりに責任を持つ保健婦活動は、今、私たちが目指す、地域にお

ける保健師活動のあり方に重なる部分が大きいと感じた。

### (iii) 沖縄の精神保健医療について歴史的な観点からの検討

沖縄県の精神科病床数は全国平均を上回っているが、病床数が増えるきっかけは1966年の精神衛生実態調査の結果、精神障害の有病率が本土の2倍であったことである。しかし、この調査は科学的なものでなく、「地域の付き合いに問題のある人」が精神障害者とみなされたとされる。ユイマールと呼ばれる、地域住民の共同体は、うまく適応できない人を排除するとのことであるが、これは私たちの身近な地域でも起こりうることであろう。医学的に問題のある調査であっても、精神障害者を監視、収容するシステムを作る根拠資料となってしまう。調査は鵜呑みにせず、その意味を見抜く必要があると改めて感じた。沖縄の精神保健の問題として、沖縄戦トラウマによる精神被害がある。統合失調症、アルコール依存症やDV、幼児虐待などの暴力、自殺などは関連があると考えられているが、解明されたわけではない。大災害後のトラウマのケースとも重なるものであり、関心をもっていたと思う。

## ③フィールドワーク3日目に国立療養所沖縄愛楽園を訪問：大内正千恵

国立療養所沖縄愛楽園の概要は、1938年11月に開園、敷地面積10万坪、入所者数187人（平均年齢82.52才）、園内物故者数1,324人である。1938年に「沖縄県告示」で「国頭愛楽園」と命名され開園となっている。その後、国立へ移管され、琉球政府発足（1952年）と同時に琉球政府の所管となり「沖縄愛楽園」に名称変更され、日本復帰（1972年）に伴い厚生省に移管され「国立療養所沖縄愛楽園」となった。政府は1907年（明治40年）、「癩予防に関する件」という、「放浪癩」を療養所に入所させ、一般社会から隔離してしまう法律を制定した。この法律は、患者救済も図るものだったが、ハンセン病は伝染力が強いという間違った考えが広まり、偏見や差別を大きくしたといわれている。1931年（昭和6年）には従来の法律を改正して「癩予防法」を成立させ、強制隔離によるハンセン病絶滅政策という考えにおいて、在宅の患者も療養所へ強制的に入所させるようにした。熊本回春病院から青木恵哉が沖縄に派遣された。青木恵哉は、自身もハンセン病を10代の時に患って

おり、キリスト教の教えに自身も救われ、ハンセン病を患っている人へキリストの福音を伝え、生きる希望や癒しを与えながら沖縄各地を伝道して回った。ハンセン病療養所設置について、青木恵哉は願ったわけではなかった。患者にとって安住の地ではあるが、療養所自体が隔離の始まりになるからだ。療養所設置については、沖縄の地元民に猛反対され、愛楽園ができるまでに30年かかった。

交流会館の担当者の説明の中で一番印象に残ったのが、園内での患者同士の婚姻である。結婚する条件として「生殖機能をさせない」という理由から行われていた優生手術（避妊手術）があった。これは、1948年（昭和23年）に成立した「優生保護法」において、その対象にハンセン病が明文化されていた。断種前に授かった命は、全て人工流産の処置を行い、生まれてきている場合殺害したそうである。園内に「声なき子供たちの碑」というのが納骨堂の隣に建っている。強制された断種・墮胎政策のもとで実施されていた生まれる事のできなかった子ども、新生児として生を受けた命を奪われた「子供たちを供養」する記念碑である。「偏見・差別」は国の政策として、国自体が行っていたのだと痛感した。有ってはならない、してはいけない事なのだが、「無知」という現状がそうさせたのでは無いかと考える。1996年（平成8年）になって「癩予防法」は廃止されたが、未だに社会における偏見・差別は残っており、療養所の中で暮らしている方が多いのが現状である。いろいろと考えさせられるフィールドワークであった。

名桜大学の院生と交流会を持ったことは、同じ院生同士で、仕事を継続しながら大学院へ通っているという事もあり、大学は全く違うが同志の様な気がした。初対面だったが意気投合し他愛のない話で盛り上がっていた。大学院での日常の事（課題レポートの事や自分がとっているゼミの事や修論のことなど）や仕事をしながらの学習という事で、職場のことなどいろいろな話をした。このような機会がなければ、他院生と交流する事もないのでとても良かった。次年度も交流会は必要だと思う。

### Ⅲ. 考 察

#### 1. フィールドワークの学びに関して

6人の参加者の学びと感想の内容を検討してみると、沖縄戦の戦跡地、米軍基地、ハンセン病療養所などを訪問し、関係者から説明を聞き、人々と接する中で多くの衝撃的な事実を知り、感じ、魂が揺すぶられる経験をして来たようだ。佐藤（2008）は、フィールドワークというのは、「異文化での生活を体験しそこで居心地の悪さを感じカルチャーショックを受けることによって、ふだんはなかなか目に見えてこない自文化の姿を、今までとは別な目で見ることができるようになる」と述べている。関西の地では、ほとんど見たことも聞いたこともない現実に身を置くというフィールドワークならではの学びをえられたといえる。

福島（2015）は、チビチリガマの遺族のその後の姿として、昼間から酒ビンを持ち歩く人を「チビチリガマで元看護婦として身内の者だけに毒の注射をし、自決した姉のことを最大の加害者と思い込んでいた彼は、その口惜しさと怒りのやり場を失った者の姿で、酒に身をまかせて、苦痛を忘れようとしたようだ」と聞き取りをしている。沖縄特有の精神障害として、沖縄戦のトラウマとアルコール依存症との関連の1事例ともいえる。また、木村（2012）が、戦時中の駐在保健婦について、日本軍の指示により、ハンセン病患者を愛楽園に入所するよう説得したり、過酷な戦場に駆り出されたりした事実を当時の保健婦から聞き取りをしている。

今回の教育実践を「看護系大学院の教育の基準策定と評価に関する調査研究報告書」の博士前期課程の習得すべき10の能力を基準にして評価すると、「IX 倫理的・文化的感受性を持ち、専門職としての責務を果たす能力」と最も関連するといえる。参加者の振り返りから、その能力を習得するための動機作りになったといえるが、事後にはさらに、関連文献で学びを深めて統合する作業が必要である。

#### 2. フィールドワークの計画に関して

今回の沖縄フィールドワークは、大学院の授業の一環として開発したものであるが、多くの関係者の協力なくしては成しえなかった。まず、院生には経済的にかなりの自己負担が課せられた。参

加者にはあらかじめ額を提示して了承を得ていたが、職業をもつ社会人であったからできた内容であった。訪問地の施設や講師などとの連携は無理なく了解が得られ、訪問校の教員や院生との交流も予定通り図られ、意義ある時間がもてた。ただし、9月の沖縄という台風の発生しやすい非常に危険な時期の選定でもあった。幸い好天に恵まれ、予定通りスケジュールが終了したが、台風時や雨天時の予備のスケジュールを用意しておくべきだったと反省している。また、慣れない亜熱帯という気候の中でハードなスケジュールでなかったか、身体的に負担が大きすぎなかったかなど、次年度の検討課題である。

#### IV. 結 論

本年実施した地域・精神保健看護学特論Ⅱの沖縄フィールドワークは、参加した教員及び院生にとって、沖縄の歴史的事実から現代の看護や未来への教育の在り方を考える好機となり、大学院教育として次年度も継続する必要があると評価できる。

#### 謝 辞

今回の沖縄フィールドワークを実践するにあたり、貴重な講演をいただいた名桜大学の永吉教授、鈴木教授、大学院生との交流会を企画していただいた大城上級准教授、永田上級准教授と院生の皆様、ガイドの比嘉涼子さまをはじめ、沖縄の現地で接した多くの皆様に深く感謝いたします。

#### 文 献

- 木村哲也 (2012) : 駐在保健婦の時代, 181-231, 医学書院, 東京.
- 佐藤郁也 (2008) : フィールドワーク増訂版 書を持って街へ出よう, 新曜社, 東京, 47.
- 週刊金曜日取材班他 (2015) : 戦後「ゼロ」年の沖縄, 週刊金曜日1039号, 14-31.
- 聖泉大学 HP, [http://www.seisen.ac.jp/gakubu/daigakuin\\_kango](http://www.seisen.ac.jp/gakubu/daigakuin_kango), [検索日2015年9月21日]
- 日本看護系大学協議会 : 平成26年度文部科学省大学における医療人養成推進等委託事業, 看護系大学院における教育の基準策定と評価に関する調査研究報告

書, <http://www.janpu.or.jp/activities/report/> [検索日2015年9月21日]

ハンセン病問題ネットワーク沖縄 (2009) : 入門沖縄のハンセン病問題つくられた壁を越えて, なんよう文庫, 沖縄.

福島栄寿 (2015) : 現代沖縄と親鸞思想—彫刻家・金城実をめぐって—, 大谷大学総合研究所研究紀要, 32, 110-114.

